栃の実

泉鏡花

朝六(あさむ)つの橋を、その明方(あけがた)に渡った——この橋のある処(ところ)は、いま麻生津(あそうづ)という里である。それから三里ばかりで武生(たけふ)に着いた。みちみち可懐(なつかし)い白山(はくさん)にわかれ、日野(ひの)ケ峰(みね)に迎えられ、やがて、越前の御嶽(みたけ)の山懐(やまふところ)に抱(だ)かれた事はいうまでもなかろう。——武生は昔の府中(ふちゅう)である。

その年は八月中旬、近江(おうみ)、越前の国境(くにざかい)に凄(すさま)じい山嘯(やまつなみ)の洪水(でみず)があって、いつも敦賀(つるが)——其処(そこ)から汽車が通じていた——へ行(ゆ)く順路の、春日野峠(かすがのとうげ)を越えて、大良(たいら)、大日枝(おおひだ)、山岨(やまそば)を断崖(きりぎし)の海に沿う新道(しんみち)は、崖くずれのために、全く道の塞(ふさが)った事は、もう金沢を立つ時

から分っていた。

前夜、福井に一泊して、その朝六(あさむ)つ橋(ばし)、麻生津を、まだ山かつらに月影を結ぶ頃、霧の中を俥(くるま)で過ぎて、九時頃武生に着いたのであった。——誰もいう……此処(ここ)は水の美しい、女のきれいな処である。柳屋(やなぎや)の柳の陰に、門走(かどはし)る谿河(たにがわ)の流(ながれ)に立つ姿は、まだ朝霧をそのままの萩(はぎ)にも女郎花(おみなえし)にも較べらるる。が、それどころではない。前途(ゆくて)のきづかわしさは、俥(くるま)もこの宿(しゅく)で留(と)まって、あとの山路は、その、いずれに向っても、もはや通じないと言うのである。

茶店の縁(えん)に腰を掛けて、渋茶を飲みながら評議をし

た。……春日野の新道一条(しんみちひとすじ)、勿論不可(もちろんいけな)い。湯(ゆ)の尾(お)峠にかかる山越え、それも覚束(おぼつか)ない。ただ道は最も奥で、山は就中(なかんずく)深いが、栃木(とちのき)峠から中(なか)の河内(かわち)は越せそうである。それには一週間ばかり以来(このかた)、郵便物が通ずると言うのを聞くさえ、雁(かり)の初(はつ)だよりで、古(むかし)の名将、また英雄が、涙に、誉(ほまれ)に、屍(かばね)を埋(うず)め、名を残した、あの、山また山、また山の山路を、重(かさ)る峠を、一羽(いちわ)でとぶか、と袖(そで)をしめ、襟(えり)を合わせた。山霊(さんれい)に対して、小さな身体(からだ)は、既に茶店の屋根を覗(のぞ)く、御嶽(みたけ)の顋(あご)に呑まれていたのであった。

「気をつけておいでなせえましよ。」……畷(なわて)は荒れて、

洪水(でみず)に松の並木も倒れた。ただ畔(あぜ)のような街道端(かいどうばた)まで、福井の車夫は、笠を手にして見送りつつ、われさえ指す方(かた)を知らぬ状(さま)ながら、式(かた)ばかり日にやけた黒い手を挙げて、白雲(しらくも)の前途(ゆくて)を指した。

秋のはじめの、空は晴れつつ、熱い雲のみ往来して、田に立つ人の影もない。稲も、畠(はた)も、夥多(おびただ)しい洪水のあとである。

道を切って、街道を横に瀬をつくる、流(ながれ)に迷って、根こそぎ倒れた並木の松を、丸木橋とよりは筏(いかだ)に蹈(ふ)んで、心細さに見返ると、車夫(くるまや)はなお手庇(てびさし)して立っていた。

翼をいためた燕（つばめ）の、ひとり地（ち）ずれに辿（たど）るのを、あわれがって、去りあえず見送っていたのであろう。たださえ行悩（ゆきなや）むのに、秋暑しという言葉は、残暑の酷（きび）しさより身にこたえる。また汗の目に、野山の赤いまで暑かった。洪水（でみず）には荒れても、稲葉（いなば）の色、青菜の影ばかりはあろうと思うのに、あの勝山（かつやま）とは、まるで方角が違うものを、右も左も、泥の乾いた煙草畑（たばこばたけ）で、喘（あえ）ぐ息さえ舌に辛（から）い。

祖母が縫ってくれた鞄代用（かばんがわり）の更紗（さらさ）の袋を、斜（はす）っかいに掛けたばかり、身は軽いが、そのかわり洋傘（こうもり）の日影も持たぬ。

紅葉先生は、その洋傘が好きでなかった。遮らなければならない日射は、扇子を翳されたものである。従って、一門の誰かれが、大概洋傘を意に介しない。連れて不忍の蓮見から、入谷の朝顔などというみぎりは、一杯のんだ片頰の日影に、揃って扇子をかざしたのである。せずともいい真似をして。……勿論、蚊を、いや、蚊帳を曲して飲むほどのものが、歩行くに日よけをするわけはない。蚊帳の方は、まだしかし人ぎきも憚るが、洋傘の方は大威張で持たずに済んだ。

神楽坂辺をのすのには、なるほど（なし）で以て事は済むのだけれども、この道中には困却した。あまつ

さえ……その年は何処（どこ）も陽気が悪かったので、私は腹を痛めていた。祝儀らしい真似もしない悲しさには、柔（やわらか）い粥（かゆ）とも誂（あつら）えかねて、朝立った福井の旅籠（はたご）で、むれ際（ぎわ）の飯を少しばかり。しくしく下腹の痛む処（ところ）へ、洪水（でみず）のあとの乾旱（からでり）は真（しん）にこたえた。鳥打帽（とりうちぼう）の皺（しな）びた上へ手拭（てぬぐい）の頬かむりぐらいでは追着（おッつ）かない、早や十月の声を聞いていたから、護身用の扇子（せんす）も持たぬ。路傍（みちばた）に藪（やぶ）はあっても、竹を挫（くじ）き、枝を折るほどの勢（いきおい）もないから、玉江（たまえ）の蘆（あし）は名のみ聞く、……湯のような浅沼（あさぬま）の蘆を折取（おりと）って、くるくるとまわしても、何、秋風が吹くものか。

が、一刻も早く東京へ――唯その憧憬に、山も見ず、雲も見ず、無二無三に道を急いで、忘れもしない、村の名の虎杖に着いた時は、杖という字に縋りたい思がした。――近頃は多く板取と書くのを見る。その頃、藁家の軒札には虎杖村と書いてあった。

ふと、軒に乾した煙草の葉と、蕃椒の間に、山駕籠の煤けたのが一挺掛った藁家を見て、朽縁へ撞と掛けた。「小父さんもう歩行けない。見なさる通りの書生坊で、相当、お駄賃もあげられないけれど、中の河内まで何とかして駕籠の都合は出来ないでしょうか。」「さればの。」耳にかけた輪数珠を外すと、木綿

小紋(こもん)のちゃんちゃん子、経肩衣(きょうかたぎぬ)とかいって、紋の着いた袖なしを——外は暑いがもう秋だ——もっくりと着込んで、裏納戸(うらなんど)の濡縁(ぬれえん)に胡坐(あぐら)かいて、横背戸(よこせど)に倒れたまま真紅(まっか)の花の小さくなった、鳳仙花(ほうせんか)の叢(くさむら)を視(なが)めながら、煙管(きせる)を横銜(よこぐわ)えにしていた親仁(おやじ)が、一膝(ひとひざ)ずるりと摺(ず)って出て、「一肩遣(ひとかたや)っても進じょうがの、対手(あいて)を一つ聞かなくては、のう。」「お願いです、身体(からだ)もわるし、……実に弱りました。」「待たっせえ、何とかすべい。」お仏壇へ数珠を置くと、えいこらと立って、土間の足半(あしなか)を突掛(つっか)けた。五十の上だが、しゃんとした足つきで、石磈道(いしころみち)を向うへ切って、樗(おうち)の花が咲重(さきかさな)りつつ、

屋根ぐるみ引傾（ひっかたむ）いた、日陰の小屋へ潜（くぐ）るように入った、が、今度は経肩衣を引脱（ひきぬ）いで、小脇に絞って取って返した。「対手（あいて）も丁度可（よ）かったで。」一人で駕籠（かご）を下（おろ）すのが、腰もしゃんと楽なもので。——相棒の肩も広い、年紀（とし）も少し少（わか）いのは、早や支度（したく）をして、駕籠の荷棒（にないぼう）を、えッしと担ぎ、片手に——はじめて視（み）た——絵で知ったほぼ想像のつく大きな蓑虫（みのむし）を提（さ）げて出て来たのである。「ああ、御苦労様——松明（たいまつ）ですか。」「えい、松明でや。」「途中、山路で日が暮れますか。」「何、帰りの支度でや、夜嵐（よあらし）で提灯（ちょうちん）は持たねえもんだで。」中の河内までは、往還（ゆきかえり）六里余と聞く。——駕籠は夜をかけ

て引返すのである。

留守に念も置かないで、そのまま駕籠を舁出(かきだ)した。

「おお、あんばいが悪いだね、冷えてはなんめえ。」

樹立(こだち)の暗くなった時、一度下(おろ)して、二人して、二人が夜道の用意をした、どんつくの半纏(はんてん)を駕籠の屋根につけたのを、敷かせて、一枚。一枚、背中に当(あて)がって、情(なさけ)に包んでくれたのである。

見上ぐる山の巌膚(いわはだ)から、清水は雨に滴(したた)って、底知れぬ谷暗く、風は梢(こずえ)に渡りつつ、水は蜘蛛手(くもで)に岨(そば)を走って、駕籠は縦になって、雲を仰ぐ。

前棒(さきぼう)の親仁(おやじ)が、「この一山(ひとやま)の、見さっせえ、残らず栃(とち)

の木の大木でや。皆五抱(いつかか)え、七抱(ななかか)えじゃ。」「森々(しんしん)としたもんでがんしょうが。」と後棒(あとぼう)が言(ことば)を添える。「いかな日にも、はあ、真夏の炎天にも、この森で一度雨の降らぬ事はねえのでの。」清水の雫(しずく)かつ迫り、藍縞(あいじま)の袷(あわせ)の袖(そで)も、森林の陰に墨染(すみぞめ)して、襟(えり)はおのずから寒かった。——「加州家(かしゅうけ)の御先祖が、今の武生(たけふ)の城にござらしった時から、斧(おの)入れずでの。どういうものか、はい、御維新前まで、越前の中(うち)で、此処(ここ)一山(ひとやま)は、加賀(かが)領でござったよ——お前様、なつかしかんべい。」「いや、僕は些(ちっ)とでも早く東京へ行(ゆ)きたいんだよ。」「お若いで、えらい元気じゃの。……はいよ。」「おいよ。」と

声を合わせて、道割(みちわれ)の小滝を飛んだ。

私は駕籠の手に確(しか)と縋(すが)った。

草に巨人の足跡の如き、沓形(くつがた)の峯の平地(ひらち)へ出た。

巒々相迫(らんらんあいせま)った、かすかな空は、清朗にして、明碧(めいへき)である。

山気(さんき)の中に優しい声して、「お掛けなさいましな。」

軒は巌(いわ)を削れる如く、棟(むね)広く柱黒き峯の茶屋に、木の根のくりぬきの火鉢を据えて、畳(たたみ)一畳にも余りなん、大熊の皮を敷いた彼方(かなた)に、出迎えた、むすび髪の色白な若い娘は、唯(と)見ると活けるその熊の背に、片膝して腰を掛けた、奇(く)しき山媛(やまひめ)の風情(ふぜい)があった。

袖も靡（なび）く。……山嵐颯（さっ）として、白い雲は、その黒髪（くろかみ）の肩越（かたごし）に、裏座敷の崖の欄干（てすり）に掛って、水の落つる如く、千仭（せんじん）の谷へ流れた。

その裏座敷に、二人一組、別に一人、一人は旅商人（たびあきゅうど）、二人は官吏らしい旅客がいて憩った。いずれも、柳ケ瀬（やなせ）から、中の河内越（ごえ）して、武生へ下（くだ）る途中なのである。

横づけの駕籠を覗（のぞ）いて、親仁が、「お前さま、おだるけりゃ、お茶を取って進ぜますで。」「いいえ出ますから。」

娘が塗盆（ぬりぼん）に茶をのせて、「あの、栃（とち）の餅（もち）、あがりますか。」「駕籠屋さんたちにもどうぞ。」「はい。」――其処（そこ）

に三人の客にも酒はない。皆栃の実の餅の盆を控えていた。

娘の色の白妙（しろたえ）に、折敷（おしき）の餅は渋（しぶ）ながら、五ツ、茶の花のように咲いた。が、私はやっぱり腹が痛んだ。

勘定の時に、それを言って断（ことわ）った。――「うまくないもののように、皆残して済みません。」ああ、娘は、茶碗を白湯（さゆ）に汲みかえて、熊の胆（い）をくれたのである。

私は、じっと視（み）て、そしてのんだ。

栃の餅を包んで差寄（さしよ）せた。「堅くなりましょうけれど、……あの、もう二度とお通りにはなりません。こんな山奥の、おはなしばかり、お土産（みやげ）に。――この実

を入れて搗（つ）きますのです、あの、餅よりこれを、お土産に。」と、めりんすの帯の合せ目から、ことりと拾って、白い掌（て）で、こなたに渡した。

小さな鶏卵（たまご）の、軽く角（かど）を取って扁（ひら）めて、薄漆（うすうるし）を掛けたような、艶（つや）やかな堅い実である。

すかすと、きめに、うすもみじの影が映（うつ）る。

私はいつまでも持っている。

手箪笥（てだんす）の抽斗（ひきだし）深く、時々思出（おもいだ）して手に据（す）えると、殻（から）の裡（なか）で、優（やさ）しい音（ね）がする。

底本：「鏡花短篇集」岩波文庫、岩波書店
　　1987（昭和62）年9月16日第1刷発行
　　　2001（平成13）年2月5日第21刷発行
底本の親本：「鏡花全集　第二十七巻」岩波書店
　　1942（昭和17）年10月初版発行
初出：「新小説」
　　1924（大正13）年8月号
※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ケ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。
入力：門田裕志
校正：米田進、鈴木厚司

２００３年3月31日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。